条幅部自由参考

5月25日正午必着

明石春浦先生書

澗花入井水味香（温庭筠）　山月また高く照している。

明石幸子書

遠方に 鳴き立つ蟬の 聲過ぎて 梢静かに 暮るる夏かな（草根集・正徹）

三浦士岳先生書

山房竹雨過。簷影靄春雲。
得與幽人會。何殊見此君。（高青邱）

山房の竹は、一しきり雨にぬれ、軒端に簇る影は、春雲の靄靄たるが如くである。ここに、幽人と會することが出來たのは、此君と稱せらる竹を見るに殊ならず、つまり、幽人は竹の如く、そして、竹の茂れる中に住んで居るのは、まことに相應しい。

条幅部創作課題

四種の詩文から一種を選択して出品のこと。

室閒茶味清　（周天度）

室閒にして茶味清し

静かな部屋に茶の香が清らかにただよう。

主人不相識　偶坐爲林泉
莫漫愁沽酒　囊中自有錢　（賀知章）

主人相識らず　偶坐林泉のためなり
漫に酒を沽うを愁うる莫かれ　囊中自ずから銭有り

この別荘のご主人とは前から面識があったわけでなく、噂に聞くお庭を拝見したかったから、こうしてお会いすることになったのです。酒を買って来て、私をもてなそうなどとご心配は無用です。それ位のおかねは持っておりますから。

登蒲澗寺後二巖　（李群玉）
五仙騎五羊　何代降茲鄉
澗有堯時韭　山餘禹日糧
樓臺籠海色　草樹發天香
浩笑煙波裏　浮溟興甚長

蒲澗寺の後の二巌に登る　李群玉
五仙　五羊に騎し　何れの代にか茲の郷に降りし
澗には堯時の韭有り　山には禹日の糧を余す
楼台　海色籠り　草樹　天香を発す
浩笑す　煙波の裏　溟に浮んで　興　甚だ長し

近よりて　われは目守らむ　白玉の　牡丹の花の　その自在心　（齋藤　茂吉）

5月25日正午必着

半紙部規定課題Ａ

５月25日正午必着

明石春浦先生書

※作品には必ず落款を入れてください。

※課題Ａ（楷書）と課題Ｂ（四体の中より一書体選択）の二点を出品のこと。

半紙部規定課題B

5月25日正午必着

行書

隷書

明石春浦先生書

草書

行草書

露の白くおりるころ、草はなおも青々と茂る　淮水を行く舟は岸によりそって碇泊する
風に帆をかけて、彼方(かなた)、此方(こなた)へ向かう旅人　空には天の川、地上には淮水、それぞれにきらめく星
樹木は静まって、鳥は草の中に眠り　岸の砂は冷たく、鹿が汀(みぎわ)を駆け過ぎる
明日の朝、私と連れだって　まっすぐに大海に浮ぼうという人はないものだろうか

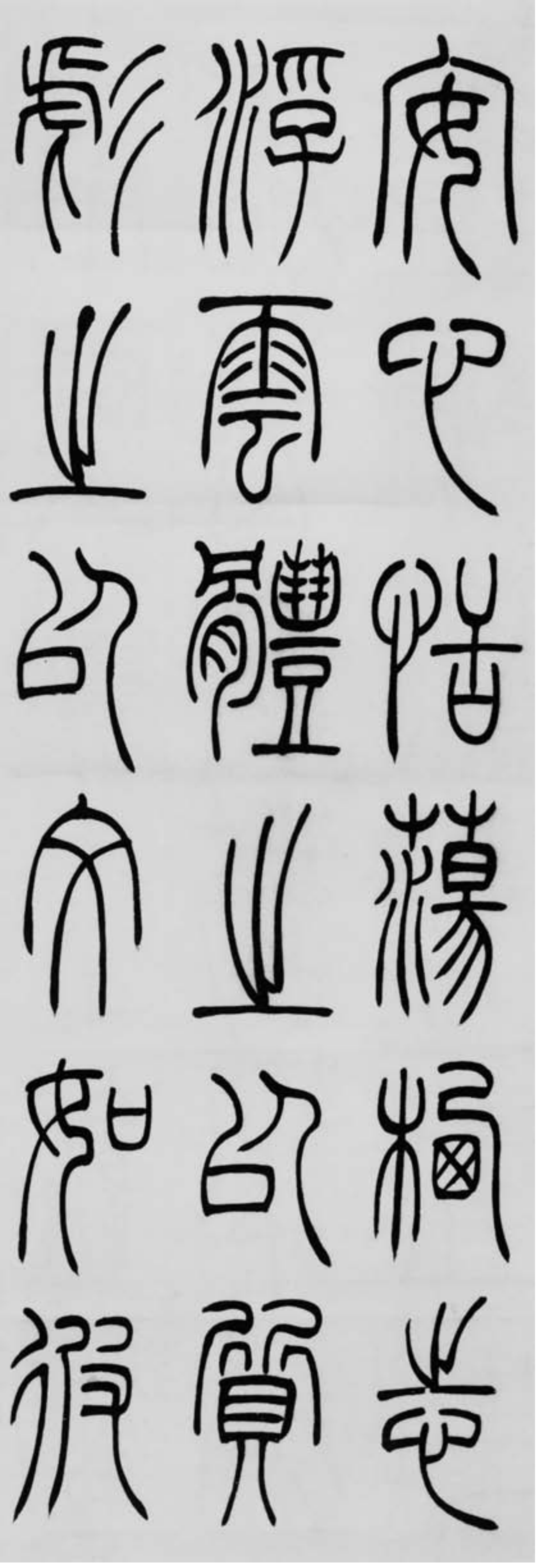
秋夜宿㆓淮口㆒　景池

露白草猶青
淮舟倚㆑岸停
風帆幾處客
天地兩河星
樹靜禽眠㆑草
沙寒鹿過㆑汀
明朝誰結㆑伴
直去泛㆓滄溟㆒

秋夜(しゅうや) 淮口(わいこう)に宿(しゅく)す　景池(けいち)

露白(つゆしろ)くして　草(くさ)は猶(なお)お青(あお)し
淮舟(わいしゅう)　岸(きし)に倚(よ)りて停(とど)まる
風帆(ふうはん)　幾処(いくしょ)の客(かく)
天地(てんち)　両(りょう)　河(が)の星(ほし)
樹静(きしず)かにして　禽(とり)は草(くさ)に眠(ねむ)り
砂寒(すなさむ)うして　鹿(しか)は汀(みぎわ)を過(す)ぐ
明朝(みょうちょう)　誰(たれ)か伴(はん)を結(むす)び
直(ただ)ちに去(さ)って　滄溟(そうめい)に泛(うか)ばん

条幅部半紙部臨書課題



安心恬蕩棲志／浮雲体之以質／彪之以文如彼　南畝力耒既勤／麃蓘致功必有／豊殷水積成淵

心（こころ）を恬蕩（てんとう）に安（やす）んじ、　志（こころざし）を浮雲（ふうん）に棲（す）ましめ　之（これ）を体（たい）するに質（しつ）を以（もっ）てし、　之（これ）を彪（かざ）るに文（ぶん）を以（もっ）てす　彼（か）の南畝（なんぽ）に如（ゆ）き、　耒（すき）を力（つと）めて既（すで）に勤（つと）め　麃（くさぎ）り蓘（う）えて功（こう）を致（いた）さば、

必（かなら）ず豊殷（ほういん）有（あ）らん　水（みず）は積（つ）もりて淵（ふち）と成（な）り、

条幅部半紙部臨書参考

三浦士岳先生臨書

心を恬蕩に安んじ、

心を恬蕩に安んじ、志を浮雲に棲ましめ　之を体するに質を以てし、之を彪るに

清　呉熙載　張茂先励志詩

呉熙載は嘉慶四年（一七九九）江蘇省儀徴に生まれ、同治九年（一八七〇）七十一歳で没したとされているが、異説もある。名ははじめ廷颺、字を熙載といい、後に熙載を名とし字を譲之とした。号は譲翁、晩学居士などと称した。

包世臣（一七七五～一八五五）に師事し、楷行草書においてその理論と技法に信奉して深い薫陶を受け、二十代の若さにして師にその資質を高く評価されていたと言われている。また呉熙載は、師包世臣が崇拝した鄧石如（一七四三～一八〇五）に私淑し、彼の篆隷書・篆刻は全く鄧法を受け継いだものと言われている。さらに画もよくし、彼の書画篆刻はいずれも高い評価を受けている。

この張茂先励志詩は、彼が最も得意とした篆書の作品の一つで、流麗な運筆のなかに縦長の字形に緊密な結体をほどこし、丸みと張りのある線質で表現されている。縦画のほとんどの終筆は穂先をとがらせ中心で抜く技法を見せている。

長脚で優美な呉熙載の篆書の技法をじっくり堪能したい。

（春濤）

5月25日正午必着

教育部毛筆

雨宮春聲先生書

菅井松雲先生書

述（じゅっ）懐（かい）　中学一年

念（ねん）願（がん）　中学二三年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

藤井良泰先生書

平(びょう)　等(どう)　小学五年

森戸春濤書

的(てき)　確(かく)　小学六年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

5月25日正午必着

細谷春誠先生書

中（ちゅう）心（しん）　小学三年

榎戸春龍先生書

元（げん）気（き）　小学四年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

明石幸子書

つ　り　　小学一年・幼年

藤田幸春先生書

人（じん）　工（こう）　　小学二年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

5月25日正午必着

ペン字部

春過ぎて夏来るらし白妙の
ところてんぐさ採る人のみゆ

春過ぎて　夏来るらし　白妙の　ところてんぐさ　採る人のみゆ（北原白秋）

明石幸子書

一般（段位）

そよぐ風と寄せる波が
自然の詩を聞かせる

一般（級位）

教育部硬筆

良い本を読むことは
心の成長へつながる

中　学

部屋のまどから美し
い緑の森が見えます

小学六年

みどりの野山をか
けまわる元気な子

小学五年

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆　中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

明石幸子書

花びらが風にまい
ながら池に落ちた

小学四年

水車のおとが
森にこだまする

小学三年

わかくさかおる
森林こうえん

小学二年

川ぎしのこうえ
んであそんだ

小学一年

こいのぼりが
そらを　およぐ

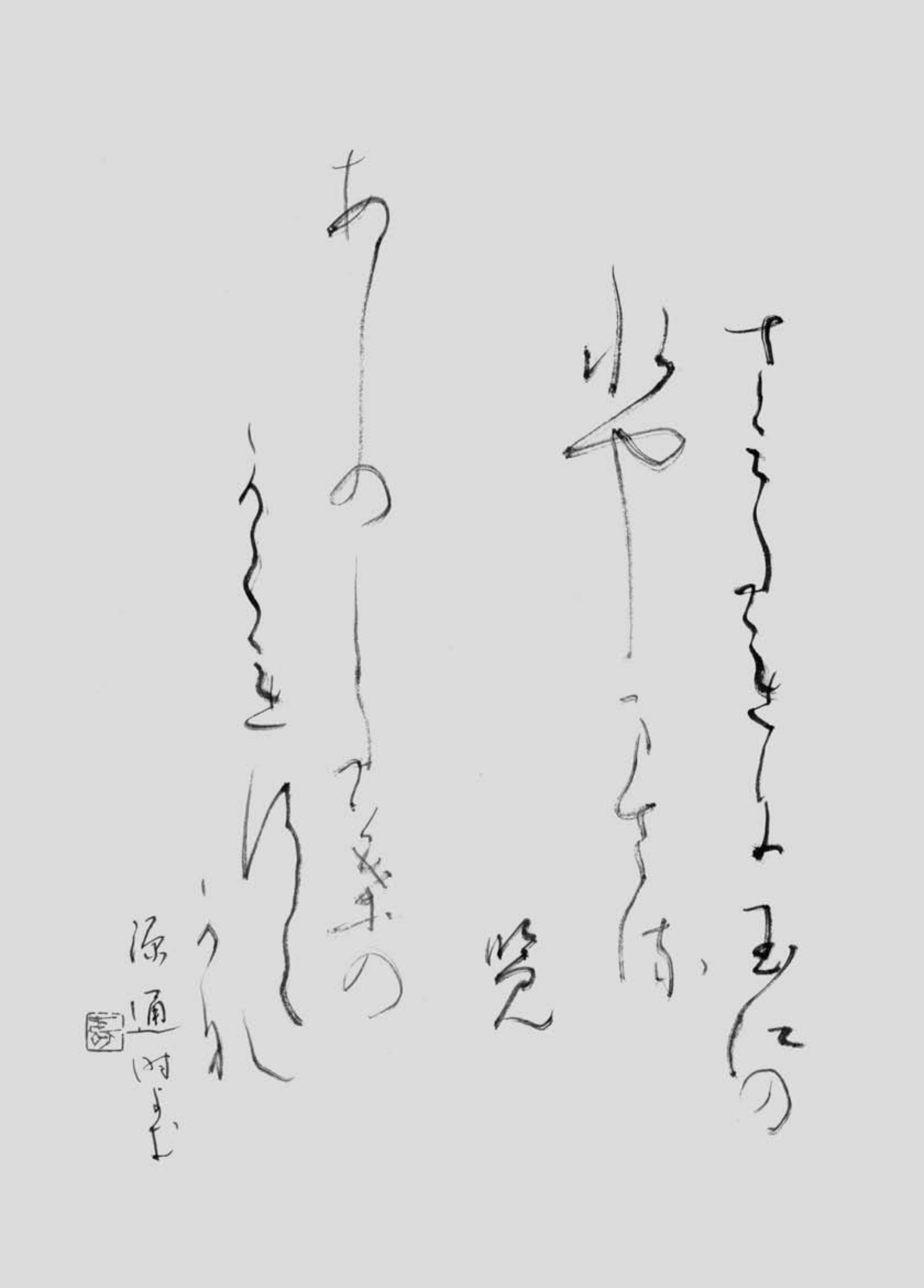
幼　年

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆　中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

半紙部かな参考

5月25日正午必着

岩本景楓先生書



さみだれに　玉江の水や　まさる覧(らん)　あしのした葉の　かくれ行くかな　（源　通時）

降り続く五月雨に、玉江の水かさが増したのだろうか。
芦の下葉のあたりが、次第に水に隠れてゆくことだよ。